

黒崎町の会

新聞からたどる黒崎の歴史 (五)

大正十一年新潟市で、大野出身者による

「親交会」がつくられた。

(先月号からの続き)

(4)「奮起せよ青年」と題し若者の奮起を求めた主張をした宗村豊七さんは、諏訪町宗村豊平さんの父で永く町内の三役として会計を勤めた謹厳実直の人だった。(5)「わが帝国の危機を如何せん」の山田勝吉さんは新町の山田工さんの叔父にあたる人で、祖父多喜蔵さんは浅間克平さんとともに大野で最初の製材組合をつくった人である。この大会で、きびしいわが国の前途について述べた勝吉さんは、大正十三年一月、製材の作業中悲運にも不慮の事故に遭って亡くなられ、それはこの大会からわずか十ヶ月後のことであった。(6)「懦弱な気を一拂せよ」の宮田庄治さんは二之町の人である。(7)「公德」の吉田竹松さんは一之町、吉田文具店、吉田広葉さんの祖父で同店を開業した人である。(8)「所感」の浅間克平さんは、前記山田多喜蔵さんらと大野製材組合をつくった人で、戦後の昭和三十一年につくられた大野町商工会の中心的な役割を果たした、

この人も実直な人であった。(9)

「証」の故小林藤司さん(現在、鳥原在住)は、元新地、小林藤四郎履物店の人で、この「証」の演題について小林さんは、これは、お宮、寛一の金色夜叉の物語を例にとり、金品や物質を欲せず木の証のようにまっすぐ生きようと述べたのだという。(10)「独立と成功」の金田大吉さんは栄町の人だということしかわからなかった。(11)「独立独立して成功すべきか」の鈴木栄三郎さんは新町の鈴木木てんや商店の人である。(12)「聞け農村青年の意気」の佐藤立三郎さんは新地の小林藤吉さんらから出られた人というが、

吉ろんから出られた人というが、家業である農業について主張したものである。(13)「国家と青年」の松井広さんは、仲町の医師で、当時黒崎村青年団長だったが、後に黒崎村長を永く務めた人である。背は低いが声は大きく、村民に「まついさま」の愛称で尊敬され、黒崎上水道を手がけた人でもある。(14)「問題と結論」の塚田徳市さんは後に大野町郵便局長を勤めた人で、現仲

町塚田医院、塚田徳昌さんの祖父にあたる人である。(15)「青年は力を發揮せよ」の山田保さんは、大野小学校と、小学校内にあった大野実業補習学校の先生だった。補習学校は高等科に進まない子供や、青年たちが学んだ学校だったので、山田先生は若者たちに、がんばれよ!!と声援をおくったものと考えられる。

前記の新潟県百年のあゆみは、大正期のわが国と世界の関係や、国内政治、農業、工業問題等を投げかけており、こうした時代背景のもとにこの雄弁大会は開かれた。そして、この日、壇上に立って自己の抱負、信念を力強く主張した十四名の青年たちも、過ぎ去った七十余年の星霜とともに今は亡い。

この大正期の新聞は、何人かの人々の祖父や父、叔父たちのことを身内の人たちに、元氣だっ

<p>親交会組織</p> <p>発会式挙行</p> <p>大野出身</p> <p>北野生</p> <p>五泉</p> <p>新潟新聞記事</p>	<p>大野出身</p> <p>北野生</p> <p>五泉</p> <p>新潟新聞記事</p>
---	--

た青年期の「コマ」として伝えていた。当時の青年たちの横顔を少しでも紹介したいと、故小林藤司さんから昔、よい仲間だったという、山田権作さん、鈴木栄三郎さん、宗村豊七さん、吉田竹松さん、浅間克平さん、家塚久一郎さん、塚田徳市さん、山田勝吉さん他全員の人たちのことを平成七年五月ころ、小林さんが九十二歳のとき、当時を思い出していたときながら記したものです。何しろ永い年月のこと、誤りがありましたらお許しをいただきたいと思えます。

小林さんは私の取材を喜ばれ、ほんとに思い出しながら話されるのを聞いたもので、私の最初の原稿には「過ぎ去った七十余年の星霜とともに十四名の青年たちも今は小林さんただ一人となった」とありますが、小林さんの元氣な内に広報くろさきに載せたいと思っていた矢先の昨年(平成八年)五月十日、小林さんは永眠いたしました。

新潟市で黒崎大野出身者の親交会

新潟新聞大正十一年三月十二日記事

大野出身「親交会」発会式挙行

当市に在住する西蒲原郡黒崎村大字大野出身者は現下僅に三百名以上に達しつつある由にて、今回有志者相互に親睦を計り社会奉仕又は救済事業につくさんことを期し、大野出身親交会を

組織の議ありしが、忽ちにして会員五十名に及びいよいよ十日午後六時本町通り三番町新川小路三松亭に於いて発会式を挙げるが、会する者五十四名にして席定まるや大湊藤吉氏が開会を宣した後、議事に入り会則を議定し、役員選挙に移り左記諸氏当選就任することに決し、箱田五郎一、三本長次両氏の祝辞演説ありて宴に入り、酒間会員の浪花節、甚句等ありて歓興盡きざるの概あり午後十時散会せりと。本会組織の趣旨を賛し基金として大野町青年会及び山際佐之助氏より各五百円づつ、其他有志者よりそれぞれ寄付金ありしと。会長永井徹一郎、副会長大湊藤吉、会計木下慶一郎、村田庄一郎、幹事種村正吉、徳永徳西他役員名略。

記事によると、大正十一年、当時の新潟市に三百人以上の大野出身者がいた。その内の五十余人の有志によって、三月十日午後六時より本町通り三番町の三松亭で行われた「親交会」発会式の模様である。会の目的、趣旨に会員の親睦と社会奉仕や救済事業を行うとうたっており、郷土黒崎から新潟市に進出した人々の意気込みがうかがわれる。残念ながらこの「親交会」、昭和前期のころには解散していたようである。

※注 山際佐之助氏は後の黒崎町長